

## こぼれ話 32

### 女流画家野村千春と日野

日本の女流画家の草分けの一人である野村千春は、明治四十一年（1908）、長野県諏訪郡平野村（岡谷市）に生まれました。画家中川一政に師事し、春陽会研究所に学びました。今年は生誕110年です。

昭和七年（1932）、児童文学者で詩人の巽聖歌と結婚、長男以彦（いりひこ）・長女やよひの二人の子供を育てながら、画業に励みました。中野区上高田に住んでいた新婚時代には、聖歌の友人だった童話作家新美南吉をモデルに人物像を描き、病弱だった南吉の献身的な看病もしました。

昭和二十三年、聖歌とともに疎開先の岩手県沼宮内から上京し、日野町東大助（旭が丘）に居を定めました。以後、平成十二年に九十二歳で亡くなるまで同地に居住していました。

昭和二十七年に旭が丘周辺を描いた「冬のたんぼ」が女流画家協会賞を受賞し、翌二十八年、春陽会会員に推挙されました。まだまだ男性が中心だった画壇で、女性では二番目の正会員となったのです。

千春の作品は、重厚で意志の強さを感じさせる油絵で、大地と花を好んで描きました。特に後半生に多く描いた花の絵は、力強く、美しく、誰にもまねのできない個性的なものです。

「畑の中の六桜社」「丘の上の日野チーズル」「冬の八高線」など、日野を描いた作品もいくつかあります。



▲晩年の野村千春